

馬獣医のよもやま話 78 前田昌也獣医師

生ワクチンだけで 安心してはいけません

静内診療所 前田昌也

そろそろ放牧地で子馬の姿を見かけるようになりました。その一方で皆さんにとって損失の大きい流産も散発しています。

馬鼻肺炎生ワクチンが流産予防のために認可され、防疫推進協議会助成のもとで接種できるようになって3シーズン目になりました。かなり普及してきており、撲滅は困難かもしれませんが発生頭数・戸数は減少傾向にあります。とはいえ「ワクチン接種したら大丈夫」ではなく、日常の衛生管理は従来通り、あるいはそれ以上に注意を払わなければなりません。

・育成馬との同居

厩舎の棟数・馬房数によって理想通りにできないかもしれませんが、やはり妊娠馬と育成馬を同じ厩舎で飼養している牧場での発生例があります。育成馬でのウイルス蔓延は注意すべきことなのです。やむを得ないとしても「同居は非常に危険だ」という認識をもち、扱う順番や同時に扱う最中の衛生管理に努めましょう。

・空胎馬・未供用馬の管理

予防接種は集団免疫が理想であり、本来なら妊娠していなくても接種して、潜伏するウイルスの体内増殖・排泄リスクを低減したいところです。非妊娠馬は現状助成対象ではありませんが、組合として今後要望を上げたいと思います。一部生産者の皆様に協力を得て、接種後の抗体持続期間を調査しているところです。「空胎馬もこの感覚で接種すればよい」という答えにつながると期待しています。

・ベストな接種時期は？

マニュアルはお持ちですか？

流産時の対応マニュアル

～馬鼻肺炎による流産を上げないために～



日高家畜衛生防疫推進協議会
胆振家畜自衛防疫推進協議会

北海道家畜産物衛生指導協会
平成30年12月

メーカーの指示では妊娠6～8ヶ月で1回目接種、4週間隔で2回目接種とされているものの、寒冷ストレスを受ける前に全頭接種して備えたいという理屈も察します。出産予定の遅い馬について、「最後に接種して出産までどれだけ間隔があるのか」把握し、3回目接種も検討する必要があります。

・それでも流産は発生する

ほとんどが単発ではありますが、生ワクチン接種牧場でも流産は発生しています。「生ワクチン自体が危ないと言われた」という声も聞きましたが、流産胎子から分離されるウイルスとワクチンの由来ウイルスは遺伝子検査で別物であることが証明されており、生ワクチン接種を辞めるという考えは現状不要と思われます。

生ワクチンが普及しても、流産発生時の対応は続発予防に大変重要です。どんな原因の流産でも、発生時は全て馬鼻肺炎を想定した作業手順を踏むことが必須です。